

笹川平和財団 2022 年度第 2 回現代中東若手研究会 成果報告書

日時：2022 年 8 月 4 日（木）17:00～

発表者：大阪大学言語文化研究科博士後期課程 木下実紀

『アフマドの書』における光のイメージと覚醒

本発表ではイラン立憲革命期（1906-1911）を代表する開明派知識人の 1 人として知られるアブドルラヒーム・ターレボフ‘Abd al-Raḥīm Ṭālebūf（1834-1911、以下ターレボフと略記）の代表作『アフマドの書（1）（2）（3）』*Ketāb-e Aḥmad*（1893, 94, 1906）を取り上げた。

本作品は父子の対話を通じて西欧的近代科学についてわかりやすく解いた啓蒙的・教育的小説で、1893 年から翌年にかけて第 1 巻と第 2 巻がイスタンブルで出版された。その後、1906 年に『人生の諸問題』*Masā’el-e Ḥayāt* がトビリシにて出版されたものが、主要登場人物が同一であることや内容の連続性を理由として、いわゆる『アフマドの書』の第 3 巻とされている。ターレボフはイラン立憲革命文学の担い手であると評される一方で、近代的思想家としての側面に光が当てられることが多く、彼に関するこれまでの研究は専ら思想的側面に着目したものがほとんどを占めている。

しかしながら、ターレボフは本作品内で史実とは異なるイラン社会を極めて具体的に描き出し、理想像としての近未来社会を提示していることから、文学的文脈分析をされうるものである。とりわけ、作品内には光のイメージを彷彿とさせる描写や、未来を担う子供に希望を託している表現、そして想像上の知識人を数多く登場させ、国民の蒙を啓くことや覚醒を意識している点に特徴がある。本発表では、作品内において光を連想させる描写や想像上の人物などに着目して分析を行うことで、ターレボフが目指したイランの未来像を明らかにすることを試みた。

発表に際して、まず『アフマドの書』の著者ターレボフの生い立ちや、作品の背景を提示した。本作品は、ジャン＝ジャック・ルソー（1712-1778）による教育的小説『エミール』*Émile, ou De l'éducation*（1762）から着想を得ており、自身の作品を東洋版『エミール』として仕上げようとしたことが本文中の言及から窺える。また、『エミール』に着想を得ている一方で、『アフマドの書』は『自然学と天文学の簡単な会話』という作品のペルシア語訳を援用していることも明らかとなっており、2つの作品を踏まえた上でターレボフは『アフマドの書』の中で創作を施している。

作品の前提知識を共有した上で、発表では、ターレボフがフィクションの手法で描く想像上のイランについての分析を中心に行なった。作中には、例えばアゼルバイジャンから資本投資を受けて設立されることになったガス工場、鑄造工場、製紙工場、蒸気製粉工場についての取り決め、タブリーズとその南の都市マラーゲの間に開通した電車、テヘラン・タブリーズ間に開通した電話線、洗剤工場と石鹼工場、紡績工場、製糖工場の開業、想像上の植物

園 (bāg-e botānik) やガス燈の設置などが描かれている。本発表では、これらの想像上の工場や施設が具現化された光として描かれていることを明らかにした。一方で、語彙的観点から光を表す単語が随所に散りばめられ、抽象的な光を表していることも示した。例えば、父からアフマドへの呼びかけとして「我が瞳の光よ」という表現が繰り返し使用されていることや、アフマドを含めた兄妹が不在の家は暗く、彼らの帰宅と共に光が差し込む様子が描かれていることを挙げた。これらの表現からは、特に未来の担い手としての子供たちが、最も輝かしい存在として認識されていることを窺わせる。このほか、イスラーム以前の時代を指す「無明時代」jehālat という言葉から明らかであるように、イスラームにおいて暗闇と光の対比は根源的なものであることを示した上で、知識と光、そして無知と暗闇を結びつけた表現が対比的に多用されていることを提示した。そして知識が敷衍されることによって、近未来のイランには優秀な人材が多く輩出されることが描かれており、適切な知識を備えた人材こそが国の宝であり、近代化を実現するための核となることや専制政治による強力な牽引による改革ではなく、教育によって民衆に埋もれている優秀な人々を見出すべきであるというターレボフの主張が見てとれると指摘した。このように、光を具体的・抽象的な形で本文中に示すことによって、輝かしい未来や蒙を啓かれたイラン、さらにはイラン人の覚醒を暗示しているのではないかと結論づけた。

報告に対して参加者からは、学校や教育的制度の変革への言及の有無、ターレボフは政治的活動を行っていたのか、近代的国家として技術面ではなく精神面の発展は主張していなかったのか、また、『アフマドの書』で描かれた教育的内容は、当時の知識人の中でどの程度共有されていたのか、などの質問があがった。これらに対し発表者は、学校や教育制度を批判する内容が描かれていることを示した。また、ターレボフは当時の国外在住の知識人と比べると政治活動は活発に行っておらず、イラン国内の体制側ともある程度の親交があったことを述べた。作品中で精神面の発展を促す内容の有無や、本作品で描かれた教育的内容が他の知識人らによる作品と比べてどの程度共有されていたかについては、これまでの主要な着眼点としてこなかったため、今後の課題とする。

コメンテーターの中村菜穂先生からは、「イメージ」という用語は詩の分野で使われるという指摘をはじめ、文学的な観点から有意義なコメントを多数頂いた。鶴見太郎先生からは、光に対して何が闇なのかに着目すると、光がより明瞭になるのではないかと指摘や、新たな技術がイランに移入される際に憧れもある一方で、植民地主義に組み込まれるのではないかと懸念がなかったのか等、さまざまな観点から御助言を受けた。これらのコメントやご指摘を、今後の研究発表や論文執筆の完成度を高める上で活用させていきたい。

最後に、本発表の運営をしてくださった笹川平和財団の皆さま、コメンテーターを引き受けてくださった中村菜穂先生、鶴見太郎先生、そして参加してくださった皆さまに心から感謝申し上げます。